中世における山城築城技術の進歩について

歴史学教室　錦織　勤

はじめに＝問題の所在

攻城戦における「戦いの場」の変化を通して，城郭構造の進化を探ることはできないものであろうか。城郭研究の基本が城跡＝遺構研究にあることに異論はないが，それには一つの，しかし決定的な壁がある。城は，創築がいつであろうと，長期にわたって使用され続けたものが多く，おのずと絶えざる改修の下におかれていたため，いまに残る城跡の殆どは，結局のところ戦国末期のものと考えざるをえないことである(1)。

そのような制約をまとわりつけた城跡をもとに，中世城郭の進化を探ろうとすれば，限られた年代しか使われなかった城を抽出して，それらをもとに各時代の城郭像を描きだす，という方法しかない。近年，そうした方向で研究が進められているが(2)，いかんせん上記の条件を満たす城は極めて少なく，さらに，遺構が廃城時の状況をそのまま示しているとは限らない，という事情が付け加わる場合もある。例えば，後に取り上げることになるが，山城では道は比較的消滅しやすいものであり，現在の登山道が往時のルートそのままであるかどうか，明らかでない場合も多いのである。小論は，そうした難問を乗り越える一つの方策として，文書史料に現われた「戦いの場」の推移のなかに，城の構造の変化を見つけだそうとする試みである(3)。

城の構造といっても様々な要素があるが，主として考えてみたいのは，山城における道と曲輪の関係である。一般に，山城では「削平地を尾根に沿って数多く築き並べ，下の曲輪が落とされれば，後ろの曲輪へ，その曲輪が落とされれば，さらに後ろの曲輪へ，といった曲輪の前後関係と量に頼って防御する」ものと理解されている(4)。その背後には，明記されているわけではないが，登り道はそれらの曲輪群を通過していく，とする暗黙の了解があるように思われる。そうでなければ，上記の機能は十分には発揮しえないからである。事実，『図説中世城郭事典』(5)などを見ると，そのような道が書き込まれた縄張図も，少なからず見受けられる。しかし，こうした通説的理解は，すでに証明ずみのことなのであろうか。

このような疑問を懐いたきっかけは，先年の羽衣石城（鳥取県東伯郡東郷町）調査にある(6)。同城には，中心部から麓に向かう数本の緩やかな尾根があり，その上に曲輪群が連なって削平されているが，現在ある２本の登り道はどちらもそれらの内部を通ることなく，「本丸」のすぐ下の段に到達するように付けられているのである(7)。通説に従うなら，我々には道は往時のものが良好に残っていると見えるけれども，実は後世のものだ，ということになろうが，それでいいのか。あるいは，曲輪

の機能や道の付け方についての通説の方に問題があるのか。遺構の調査からは解決が難しい，この疑問を解く手がかりを得たいというのが，本稿執筆の直接の動機である[8]。

第1章　城攻めの場

城を攻めるとき，城のどの部分をどのように攻めたのか。まずその点をみていくのであるが，基本的には当時の軍忠状・感状・書状などの第一次史料だけを用い，軍記物の類は原則として利用しなかった。また地域的には中国地方に限り，時代的には南北朝期～織豊期までとした[9]。

巻末の表1・2・3は，それぞれ南北朝期・室町期・戦国期の攻城戦の場を一覧にしたものである。これに関して断っておきたいのは，次の4点である。

(1)1つの城の1つの戦闘地点に関しては，複数の史料がある場合でも1ヶ所として扱った。

(2)同じ城でも，異なる場所での戦闘は，それぞれを1ヶ所として数えている。ただ，郡山城の城下での戦いだけは，「諸口」と一括して表現した史料もあるので，1ヶ所とした(表3№69)。

(3)複数の項目に亘る表現をしている場合は，より細かく場所を指し示している方を採用した。例えば「大手中尾」(表1№18)は，広い空間を指す「大手」ではなく，より狭い地点の「中尾」(尾崎)で採っている。

(4)「戦いの場」の項目については，煩瑣になることを顧みず，できるだけ史料の言葉をそのまま用いることにしたが，表3№31「神辺表」だけは「麓」に入れた。

表4は，表1・3の「戦いの場」を分類集計したものである(表2の室町期は4例しかないので取上げなかった)。以下，表4の分類項目について，簡単に説明しておきたい。

1，大手・搦手

「城郭用語辞典」[10]によれば，大手とは「城の表側，あるいは防御正面のこと」で，「広い意味に用いる場合と，正面虎口に至るルートを厳密に規定する用法」とがある。表1の№1～9は，おおむね前者の意味に用いられているとみてよい。

搦手とは「城の背面」のことで，表1に№10～14の5例がある。

2，尾頸・尾崎（尾）

表1№15・16と表3№1～15の「尾頸」（おくび）とは，城が緩やかな尾根や台地の先端に築かれた場合，その尾根・台地の付根あたりを指す言葉である。そのことは，例えば岩国城の図[11]，あるいは江美城の図[12]などによって明らかである。尾頸というのは，中国地方の方言らしく，他の地域にはあまり見当たらないし，安芸の国人が「八幡山西尾頸」と記した場所を[13]，『太平記』では「西ヘナダレタル尾崎」といっている事例もある[14]。尾頸は弱点の一つであるから，築城の際には細心の注意を払って防御施設(堀切・土塁など)が構築されるが，人工の堀切では深さに限界があり，常に攻撃の対象とされた。

表1№17「北頸」は，「北の尾頸」という意味と考え，ここに集計した。また表3№16・17の「らんとうの尾」・「小高丸」も尾頸に入れた。「らんとうの尾」については，『角川日本地名大辞典　32島根県』は松江市法吉町の白鹿山の麓と推定している。しかし，毛利方が仕寄穴を掘り，守備側もそれに応じて「多賀丸より横穴をほり候て防」いだとあるのだから，山の麓ではなかろう。また，尾崎では仕寄穴を掘るほどの足掛りがあるとは思えない。場所は特定できないが，どこかの尾頸で

表 4　戦いの場の集計

戦いの場		南北朝期 件数	南北朝期 合計	南北朝期 %	戦国期 件数	戦国期 合計	戦国期 %
大手			9	30.0			
搦手			5	16.7			
尾頸			3	10.0		17	15.7
尾崎			1	3.3		3	2.8
ふもと	山手	5	7	23.3	1	64	59.3
	麓	1			16		
	山下				8		
	城下				5		
	詰口				5		
	攻口				7		
	口				4		
	諸口				3		
	仕寄				3		
	岸際				2		
	岸崖				1		
	浜手	1					
	固屋口				7		
	二の丸口				1		
	塀際				1		
虎口	木戸（口）	4	5	16.7	1	4	3.7
	虎口				3		
	土橋	1					
切岸	切岸				6	9	8.3
	塀際				1		
	塀足				2		
水手						3	2.8
曲輪	外横				1	7	6.5
	段				1		
	小屋丸				1		
	二・三の丸				3		
	天神丸				1		
その他	抱口					1	0.9
合計			30			108	

はないかと推測される。「小高丸」というのは，白鹿城の尾頸に当る標高200m余りの峰のことである[15]。「丸」といわれているところからすると，何らかの構築物があったとみるべきであろうが，そうだとしても白鹿城の曲輪というより出城的なもので，尾頸に分類するのが妥当と考えた。

「尾」とは，「山の裾野の延びた所，ふもと，山裾」(『日本国語大辞典』)のことであるが，城山の山裾であるから，ある程度，急な斜面となっていると想像される。その斜面の上は「尾崎」と呼ぶのがふさわしい場所である[16]。尾での戦いというのは，おおむね尾崎，そこから中核部へ伸びる尾根上でのこととみてよい。

表 3 №19～20に加えて[17]，№18の「小白鹿」も「尾崎」に入ると思われる。村田氏の作図(注15参照)によれば，小白鹿とは城から南に伸びる尾根の先端の高まり，標高113mの地点(小白鹿山)のことである。旧『島根県史』[18]では，「小白鹿丸(二ノ城)」という曲輪があったように記述されているが，最も精密な村田氏の図には曲輪の記載はない。曲輪での戦いというより，尾崎での戦闘とすべきであろう。

3，ふもと

山城の「ふもと」での戦いは数多くみられるが，呼び方には様々なものがあった。まず「山手」について。表 1 №19～23と表 3 №21。山手とは「山の方。山に近い方。山のある地域」(『日本国語大辞典』)である。攻城戦は必ずしも城の近傍で戦われたとは限らず，城からかなり離れた場所での戦闘もしばしばあった。そうしたなかで，城の間近まで迫ったことを強調するために「山手」といったのであろう。

「麓」「山下」「城下」(表 1 №24，表 3 №24～52)と，「詰口」「攻口」(表 3 №53～64)は，地域的には同じところと考えられる。攻口とは「攻めかかる所，攻め入る所」(『日本国語大辞典』)で，詰

口も同義である。そのことは，『太平記』巻18に「攻メ」を「ツメ」と訓んでいる例があることや[19]，詰口と攻口を互いに言い換えているものも若干あること[20]，などによって確かめられる。なお「諸口」（表3 No.69～71）とは攻口が複数あるとき，それらを総称する言葉として用いられている。そうした攻口・詰口となったのは，表3 No.69の郡山城の諸口が，堀縄手・鑓分・相合口・祇園縄手等，いずれも城下のあちこちでの戦いだったこと[21]などからいって，城の麓の地であったとみてよかろう。

「口」としたものは表3 No.65～68，いずれも出雲の富田城に関わるものである。本丸のある月山の西麓には，広い台地が飯梨川まで続いていて，その部分には塩谷口・御子守口・菅谷口という3つの出入口が設けられているが，No.65とNo.67はそこでの戦いであった。No.68の七曲口とは，尼子滅亡後，毛利支配下での呼称であり，上記3口のいずれかのことと推測されるが，詳しくは不明である。No.66の鐘尾寺口とは，鐘尾の洞光寺口の意で，同寺は城の東側，新宮谷の出口辺にあった[22]。どれも城の麓の地で，虎口そのものでの戦いという可能性も否定できないが，もう少し広く，攻口での戦いとみる方がよさそうである。

「仕寄」（しより，表3 No.80～82）とは「敵城を包囲・攻撃する時に設ける臨時の塀・柵などの構築物。また，それを用いて攻め寄せること」（『岩波古語辞典』）である。場所ではなく攻め方に関する用語。本格的にじっくり攻める攻め方である。仕寄の場所は，例えば表3 No.80の鳥取城では，城から4，5町ほどの近陣に塀・堀・柵を設けたとあり[23]，山の麓であったことがわかる[24]。他の事例も同様であったと思われる。

「岸際」は表3 No.22・23にみえる。No.23には，羽衣石城の岸際で数百人を討捕ったとあるが，別の史料には「去十三日至$_2$羽衣石$_1$動申付候処，彼衆中出合候間，及$_2$合戦$_1$追崩，宗徒之者百余討捕」と見えている[25]。つまり，8月13日の戦いは，攻め寄せた毛利方に対し城中からも攻めおろして合戦となり，（毛利方が）主だったもの百余人を討捕ったというものであった。岸際とは，山麓の崖の際（きわ）とするのが妥当であろう[26]。

「岸崖」（表3 No.93）も同様の言葉と考えられる。「小松城の岸崖に至り，天神山の衆，取り詰むるの処，合戦に及ばる」（天神山の衆が，小松城の岸崖に向かって攻め寄せたところ，合戦となった）というのであるから，崖を攻め登って戦ったというのではなく，山の麓での戦闘と解するのが自然である。

表1 No.25の「浜手」とは，城の麓の浜手（「浜の方，浜辺」）での戦いである。

続いて「固屋口」（表3 No.72～78）について。市村高男氏の研究によって[27]，小屋＝固屋とは暫定的な建物を意味すること，山城の麓にある根小屋は城郭の外郭を構成する要素であったこと，そこは攻城戦の際には真っ先に攻撃対象とされたこと，などが明らかにされている。「固屋口」というのは，麓の固屋（館・根小屋）に始まる城への登り口という意味である。そこには堀・土塁や塀などの構築物があり，激しい争奪戦の舞台となった（表3 No.75）。なお，No.78の固屋は「当日，固屋切り崩され（中略）敵城落去，ほどあるべからざるの由（中略）本丸落去のご左右，あめやま待ち申し候」とあることから，麓の根小屋のこととみられるので[28]，固屋口に含めた。

「二ノ丸口」（表3 No.79）について。これは例えば，三の丸から二の丸への出入口のこと，などと解せなくもないが，守備側が「二ノ丸口」に付け置いた山県筑後守らが働いたというのであるから，二の丸への登城口とするほうがよさそうである。「ふもと」に分類したのはそのためである。

なお，表4「ふもと」の中の「塀際」とは表3 No.95であるが，これについては第5項で述べる。

4，虎口

表3 No.84～86の「虎口」(固口・小口)とは城の出入口のことである[29]。「木戸」(表1 No.26～29，表3 No.83)は「城戸」とも書き，城門のことである。どちらも城の出入口＝城門付近での戦いで，攻口・詰口での戦いに比べれば，城にいっそう肉薄した戦いとみてよかろう。

表1 No.30の「土橋」は堀の一部を掘り残して通路としたものをいい，城の出入口に当たる。三隅城は比高160m余の山城であるから，大手土橋は山上ではなく麓にあったとみるべきである。

5，切岸

表3 No.87～92の「切岸」は「山城の崖や堀の斜面を表わす語」(「城郭用語辞典」)であるが，中国地方の戦国期の史料では，切岸はおおむね堀の斜面ではなく山城の崖を指している。その上部には塀や柵があったから，切岸での戦いは「塀際」の戦いとも記された(表3 No.92とNo.94)[30]。ただ塀際は，すべてが切岸の上だったわけではない。表3 No.95の白鹿城の記事は「要害より我ら詰口へ仕懸り候のところ，すなわち懸け合い，城内へ追込み，塀際において敵討ち捕る」というものであるが，関連して注意すべき記事が『雲陽軍実記』に見られる[31]。「白鹿麓に二の城戸を堅めし大将は常福寺普門西堂(中略)普門西堂の催しに応じ，忍び忍び兵糧を城中に入れて，木戸に四五百人閉籠る」という記述である。麓に木戸(固屋)が設けられており，人数はともかく，そこにはかなりの兵が立て籠っていたという点は信じてよかろう。塀際は詰口に近い場所にあったという，No.95の記事から受け取れる印象に，この記事を重ね合せると，麓の木戸口の塀際とするのが妥当と考えられる。「攻め上る」とか「駆け登る」といった言葉がないのも，「城内」が山の上の曲輪ではないことを示している。

「塀足」(表3 No.96・97)も，塀際とほぼ同義である。従って，これにも切岸の上だけでなく，麓の固屋の塀もあったと考えられるが，No.97についてはどちらか決め難いので，ひとまず切岸に分類しておく。なおNo.96は，同じ戦闘を「切岸」と表現したものがある(No.91)から明らかである。

6，水手・曲輪・その他

水手(表3 No.98～100)として1項目設けたが，その位置は城ごとにまちまちであるから，城の部位として同一に考えられるというものではない。

表3 No.101～107までは，いずれも曲輪を舞台とした戦いということで一括した。ただ，No.103の「小屋丸」というのは小屋のある曲輪の意で，そこを堅固に守ったことを賞した感状であるが，「旗山」が山城か平城かさえも不明なので，曲輪の内部での戦いなのか，それとも小屋丸への登口でのものなのか，判断できない。No.105は，高瀬城で「小高勢(瀬)」と「二ノ丸」を焼き崩したという記事であるが，これも二ノ丸という曲輪内での戦闘かどうかはっきりしない。この2例はひとまずここに分類したが，確かなものではない。

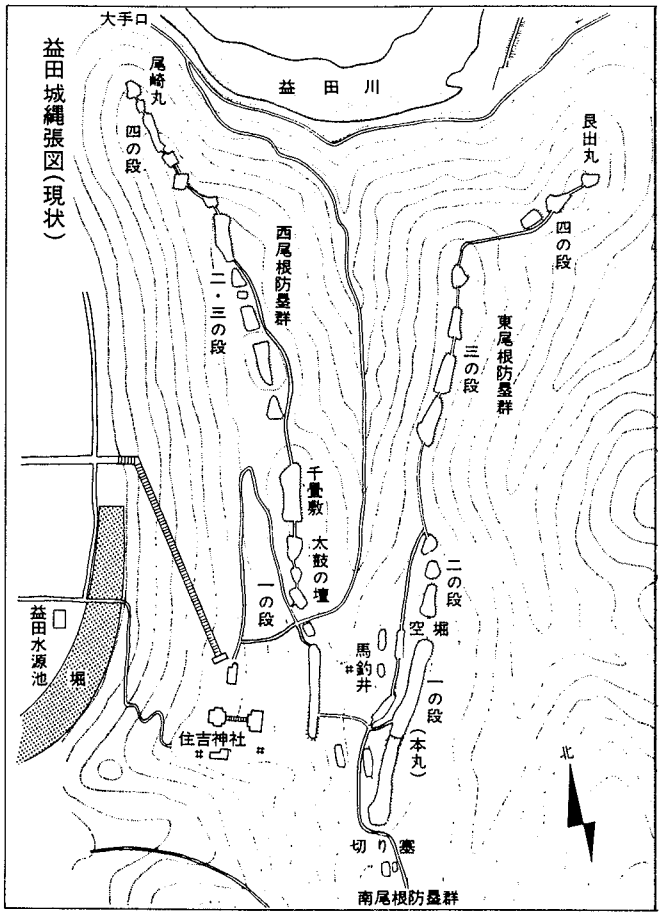
残る5例は確かに曲輪に攻め込んでいるが，そのうちNo.107は現形＝内応によって攻め落としたという記事であるし，No.101・102・104はいずれも平城であるから，山城での戦闘とは区別して考えなければならない。No.106は「二三の丸まで仕取る」とあるが，その経過までは記してくれていない。つまり，“普通に”山城の曲輪内に攻め込んだ事例は，意外に乏しいということになる。

「抱口」(表3 No.108)は，守備を受け持っている場所という意味であり，細かな場所については不明である。

第２章　城攻めの場の変化

第１節「尾崎」での戦い―南北朝期を特徴づけるもの―

図１　島根県・益田城図



『探訪ブックス［城６］山陰の城』
（小学館，1981年４月）より転載

最初に取上げるのは「尾崎」での戦いである。表４をみると，「尾崎」は両時期とも3.3％と2.8％で，数値の上では変化はないといってよい。しかし，内容に立ち入ってみると大きな違いがあった。まず戦国期の３例（表３№18～20）についていえば，№19「宮崎尾」と№20「明神尾」はどちらも城郭そのものの尾崎ではないのである。「宮崎尾」というのは，尼子が郡山城を攻めるために構築した陣山（宮崎）の尾崎であったし（籠城側の毛利氏の反撃）[32]，「明神尾」というのは，標高568mの絵下山の北に延びる二つの尾根のうち，東の尾根に矢野城があり，西が明神山であるが，その明神山の尾根という意味である。明神山は矢野城の尾頸に繋がる要衝で，守備側の野間氏と攻撃側の毛利氏との間に激しい争奪戦があった山である。№18の「小白鹿」も，距離・位置関係などでは異なるところも大きいが，未加工の尾崎であったという点では（前章第２項参照），明神尾と共通しているところがある。つまり，表４で戦国期の尾崎を攻めた事例としたものは，詳しく見ると未加工の尾崎か，城そのものではなく攻撃側の築いた陣山などであった。逆にいえば，念入りに普請された尾崎を攻めた，という記事は見当たらないということになる。

しかし南北朝期はそうではなかった。表１№28は「大手中尾」というのであるから，間違いなく城の尾根での戦いである。また，分類上は「木戸」に入れたが，表１№16の益田城での戦いは「北尾崎の木戸を責め破」るとあるから，西側の尾根の先端部分（通称「尾崎丸」）に木戸があって，そこでの戦いだったことがわかる[33]（図１参照）。これを加えると尾崎での戦いは２例，パーセンテージ

では6.7%ということになり，戦国期との差異は無視できないものとなる。

では，南北朝期には尾崎から攻め上っているのに，戦国期になるとなぜ攻めなくなったのか。忘れ去られたのか。陣山や未加工の尾崎は重要な攻撃ポイントとされていたのだから，忘れられたのではない。常識的にいえば，尾崎は攻めやすい場所と思われる。比高はさほど高くないし，いったん登ってしまえば見通しが利き，側面からの攻撃は考慮しなくてよいという利点もあるからである。それなのに，戦国期には山城の尾崎を攻めたという事例は，皆無に近いのである。

その理由を明らかにするために，まず南北朝期の尾崎はどうなっていたのか，そこに何があったのかを考えてみよう。重要なのは，先にも触れた表１№27の益田城の事例である。「かの城に押し寄せ，北尾崎の木戸を責め破り，散々に合戦を致す」という記事から，南北朝期の益田城には，西側尾根の北麓から尾崎にたどりつく登り道があり，そこには木戸があったと知られるが，地形からいって，道はそのまま尾根上を中核部分へ通じていたものと想像される。

表１№18の「大手の中尾において」というのも，道での戦いだったと考えられる。軍忠状では自らの軍忠を誇るために，より困難な場所での戦いを優先的に記すものである。仮に尾崎の崖をよじ登ったのであれば，「大手中尾の切岸」というはずである。それなのに，「大手中尾」としか記していないのだから，それは尾根筋の道での戦いだったとみるべきである。２例しか挙げえなかったが，次に述べる点を考慮すると，一般的に南北朝期の山城では，尾根上を登る道が付けられていた，とみて差し支えないと思う。

そもそも，登山道は尾根道をとる場合が多かったようである。藤井尚夫氏は「山越え道には二種類の道がある。沢道と尾根道であ」り，「尾根道の方が高低差は大きくなるが，古い道はこの尾根道の方が多いようである」と述べている。理由として，見通しが利くことと道を維持しやすいことを挙げているが[34]，そうした条件は山越え道に限らず，普通の登山道についても当てはまるはずである。南北朝期の山城は，多くの場合，臨時的に構えられたものであった[35]。従って，道に関しては既存の道＝尾根道をそのまま利用した可能性が高い。戦国期の陣山も同様で，ここでも道を付け替えるほどの普請は望むべくもなく，既存の道＝尾根道を利用したものと思われる。戦国期でも，陣山などでは尾崎での戦いがみられたのは，そのためであろう。

このようにみてくると，南北朝期の山城や戦国期の陣山で尾崎が攻められやすかったのは，地形の本来的な特質からだけでなく，そこに道があったという条件が重なってのことだ，という結論にたどりつく。ただそのように主張するためには，尾崎を攻めなくなった戦国期の山城には，そうした道がなかったことが証明されなければならない。次にその点を考えてみよう。

第２節　「切岸」での戦い―16世紀前半を特徴づけるもの―

着目したいのは，「切岸」での戦いである。表４によれば，切岸での戦いは戦国期にしか見られない。南北朝期には，切岸という言葉がなかったわけではないが，そこを攻め登ったという記事は見当たらないのである[36]。ところで，戦国期に戦いの場となった切岸とは，山城のどの辺りにあったのか。山城は，言ってみれば，至るところ切岸なのであるが，問題の切岸は多くは城の周辺部分，つまり尾崎の辺りのそれであったようである。

表３№88には，「有田要害に至り出張候，当手衆切り懸り候て，彼の切岸において戦功を抽んず」とあるが，これは戦闘開始とともに切岸に取りついたように読める。この有田城攻めに関しては17通の感状が残っていて，そのうち戦いの場所を記すものは７通あるが，内訳は山下小溝２，切岸５である[37]。もし切岸が山の奥深いところにあったのなら，たどりつくまでに戦死・負傷したものも

数多く，感状にはおのずとそうした事情が現われてくるはずである。№92の槌山城の切岸に関しても，別の史料[38]には「岸まで彼の衆罷り出で候ところに，吉川衆罷り上られ，稠しき矢軍」があって，そのまま「吉川衆切岸へ追い上げ」たとある。城方が打って出たのに対して，吉川軍が矢軍(やいくさ)の末，そのまま切岸に追い上げたというのだから，それは尾崎の辺り以外にはない。

地形からいえば尾崎での戦いであったのにも拘らず，切岸と記されたのであるが，そのことからは，戦国期の城郭では，尾崎は切岸であったこと，即ち道がなかったことがわかる。道のついた尾崎があるのに，あえて切岸を攻め登るとも思えないから，一般的にそうなっていたとみていいと思う。臨時的に構築された南北朝期の城や，戦国期でも陣山では，道を付け替えるような工事はなされず，従って尾根道のままであったが，戦国期の本格的な築城ではそうではなかった。戦国期には築城の際に道が付け替えられ，尾崎を通らなくなっていたのである。

とはいえ，付け替えられた道がどのようなものであれ，登るという点だけからみれば，道の方が切岸より容易であることは言うまでもなかろう。切岸での戦いというのは，崖の途中で守備側と攻撃側が白兵戦を展開するというものではない。守備側は塀・柵の内側に身を潜めながら，よじ登ってくる寄手を攻撃し続けるのである。攻城軍にとって極めて危険な選択であったことは明らかである。なおかつ敢然と行なうには，敵がよほど無警戒であった場合を除けば，他から(現実的には道から)攻めるより切岸を登攀する方がまだしも容易である，という条件がなければなるまい。つまり，戦国期に切岸から攻めた事例が少なからずあるという事実は，反対に，道から攻め登ることの困難さを照し出していると考えられるのである。

尾根道ではないとすれば，谷間か山腹を通るほかない。それは真上から見下ろされる道である。しかも尾崎・尾根筋には曲輪も築かれていた。戦国期の山城では，道を攻め上る攻撃軍は，側面上方からの攻撃にさらされ続けることが予想される。極めて長い距離に亘って。これは攻める側にとっては，まことに厄介なことである。いきおい，道を攻め登ることには慎重にならざるをえなくなったものと思われる。その結果，時として切岸からの攻撃が選択されることもあったのである。

あるいは，道の終点に当る虎口の進化も作用しているのでは，と疑われるかもしれない。だが，それには否定的にならざるをえない。一昨年から昨年にかけて，鳥取県内に遺る代表的な中世城郭を30ヵ所余り調査したが，明瞭な虎口の構築はほとんど認められなかった。特に注目されるべきは，大山山麓地域に特徴的な，台地の先端を加工したものや平地の城の遺構である。それらの防禦は人工的な構築物に依存するところが大きいと思われるが，それでも土塁を切っただけの，ごく単純な虎口しか見出せなかった[39]。そのことからすると，この地域で，虎口の発達が攻撃を切岸に向かわせたとは考え難いのである。

第3節　尾頸での戦い—16世紀後半を特徴づけるもの—

ところで，切岸を場とする戦いは，戦国期を通じて見られたわけではない。表5・6はともに表4の戦国期の事例を整理したものである。表5は年代分布を示したもの[40]，表6は16世紀の前半と後半で，戦いの場がどのように変化したかをみようとするものである。なお，16世紀前半の件数が，表5では40件なのに表6では39件，16世紀後半についても61件が60件となっているのは，№91と96および№92と94とをそれぞれ一つにまとめたためである(後述)。

まず注目されるのは，「切岸」のほとんどが16世紀前半に属していることである。表4には9例みられるが(表3 №87～92・94・96・97)，このうち№91と96および№92と94は同じ戦いの記事なので，集計上は各1例とすれば，正味は7例になる。ところが表6によれば，そのうち6例は16世紀前半

表5　史料の年代分布（戦国）

年代	件数	%	小計	%
1500				
1510	5	4.6		
1520	15	13.9	40	37.0
1530	1	0.9		
1540	19	17.6		
1550	17	15.7		
1560	15	13.9		
1570	12	11.1	61	56.5
1580	17	15.7		
不明	7	6.5	7	6.5
合計	108		108	

のもので，後半には1件しかない。しかも，その1件も実は1551年のものなのである(表3の№91・96)。つまり，切岸での戦いはほぼ16世紀前半に集中していて，後半には見られなくなるといってよい。全体に占める割合も，15%余りから2%弱に激減している。それはどうしてなのか。

16世紀後半に，新たに切岸が攻めにくくなった状況が生まれたと考える外ないが，それに関して重要なのは，16世紀半ばの畝状空堀群の出現である。畝状空堀群とは，山腹に竪堀と竪土塁を交互に並べて築いたもので，「山麓から攻め登ってくる敵，つまり下からの攻撃を阻止するために効果絶大」な施設であった。近畿・中部・中国地方では，天文10年代(1541～)から永禄年間(～1570)を中心に，爆発的に拡がったとされている[41]。すなわち，畝状空堀群の流行と切岸からの攻撃の消滅とは，ほぼ同じ頃に起こっているのであり，両者の間になんらかの関係があったことは確実である。というよりむしろ，畝状空堀群の効果をこの数値が実証していると言う方が，適切であろうか。

表6　16世紀の戦いの場

戦いの場		16世紀前半 件数	16世紀前半 合計	16世紀前半 %	16世紀後半 件数	16世紀後半 合計	16世紀後半 %
尾頸			3	7.7		14	23.3
尾崎			1	2.6		2	3.3
ふもと	山手	1	25	64.1		33	55.0
	麓	4			10		
	山下	1			6		
	城下	1			4		
	詰口	4			1		
	攻口	7					
	口	3			1		
	諸口	1			2		
	仕寄				2		
	岸際				2		
	固屋口	3			3		
	二の丸口				1		
	塀際				1		
虎口	木戸（口）	1	3	7.7		1	1.7
	虎口	2			1		
切岸	切岸	5	6	15.4	1	1	1.7
	塀際						
	塀足	1					
水手			1	2.6		1	1.7
曲輪	外横				1	7	11.7
	段				1		
	小屋丸				1		
	二・三の丸				3		
	天神丸				1		
その他	抱口					1	1.7
合計			39			60	

16世紀前半には，切岸からの攻撃が全体の15%を占めていた。それが後半になるとみられなくなったのであるが，その分はどこに向かったのであろうか。表6をみて顕著なのは「尾頸」と「曲輪」の増加である。後者については，前章第6項で述べたように，7例のうちに平城が3例あり(表3№101・102・104)，また内応者と城方との戦いも1例ある(№107)。残る3例についても曲輪をどのように制圧したか不明で，全体として，切岸の激減と単純に結びつけることはできない。一方，尾頸からの攻撃は，南北朝期～16世紀前半までは，全体の8～10%程度に止まっていたのに，この時期，急に23%余まで増加してくるのは，切岸が攻めにくくなったことの

影響と考えてよいと思う。

16世紀後半には「尾頸」と「ふもと」で9割近くになる。尾頸以外からはもはや，城に肉薄することが不可能になっていたのである。それは，攻撃すべき尾頸のない山城では，攻め込める場所がないということでもある。そうした事情と，16世紀後半になって稲薙・麦薙などの戦法がめだってくることとは，無関係ではないと思われる。山本浩樹氏によれば[42]，中国地方での稲薙・麦薙は，初見は備後国神辺での天文17年(1547)のもの(表3№31)であるが，その他は16世紀後半の6例である。史料の残存の密度ということを考慮に入れても，16世紀後半に集中していることは明瞭である。山城の構造が進化し，城に詰め寄ることさえ困難になったため，敵を城から誘い出すのに有効な，稲薙という戦法が盛んになったとみることができよう。

一つ補足をしておきたい。本章第1節の末尾に，南北朝期に尾崎が攻められやすかったのは，そこに道があったためで，戦国期に攻めなくなったのは道がなくなったからと書いたが，それは正確ではなかった。正しくは次のように言わなければならない。16世紀前半にはなお尾崎(切岸)を攻めていたのだが，それが尾崎ではなく切岸と記されていただけだった，尾崎が攻められなくなったのは，道がなくなっただけではなく，切岸に竪堀が連なるようになる，16世紀後半になってからだった，と。

むすびにかえて―山城構造の進化について―

これまで述べてきたところを，城の構造の変化という点に絞って振り返ってみよう。南北朝期の山城では，麓から尾崎に登り，そのまま尾根筋を行くように道が付いていて，道の要所には木戸を設けて守りを固めるという構造であった。ところが戦国期の山城の道は尾根道ではなくなる。自然，山腹か谷あいを通ることになるが，それは始終，上方から見下ろされ続ける道であった。多くの場合，尾根には曲輪が造成されていたから，寄手はそこに配置された守備兵からの攻撃を受け続けることになる。同時に，城から出撃した守備側との戦闘も覚悟しなければならない。道を攻め登ることは，南北朝期よりも格段に困難になっていたと想像される。16世紀前半に，切岸での戦いが全体の15%ほどみられるのは，道を攻め登ることの困難さと，尾崎の切岸を登攀する危険性との比較の中で，後者を選んだ結果なのである。

16世紀の半ばになると，切岸の加工に新たな技術が開発される。畝状空堀群である。もちろんそれだけがもたらしたものではなかろうが，切岸を攻め登ることも不可能になっていった。そこで増えていったのは，尾頸からの攻撃である。尾頸から攻めること自体は南北朝期からみられるが，それまで10%以下だったものが，16世紀後半には全体の23%余を占めるようになっていく。それは，道からも切岸からも攻めにくくなったことの裏返しなのである。

中国地方の山城を考える上で，山城の進化が，こうした道の付け方の工夫と竪堀の進歩によってもたらされた，と考えられることはとりわけ重要である。言うまでもなく，これまで述べてきたところは，虎口や馬出・折邪などの進歩がなかったことを論証したものではない。しかし，鳥取県内の主要な城郭30箇所余りを調査したところでは，虎口は土塁を切っただけの単純なものがせいぜいであったし，馬出・折邪なども見当たらなかった。数は少ないが広島・島根での調査経験に照しても，『図説中世城郭事典』(前出)の縄張図をみても，そうした印象は変わらない。

そうだとすると，この地方の中世山城では，虎口に注意を向ける前に，道を機能的に取付ける――道をできるだけ長く取り，その間に，上方の曲輪や道から攻撃し続けるように造作する――こと

と，切岸を登りにくくするために，竪堀(畝状空堀群)を整備することにこそ，まず神経を集中していたといえるのではないか。大胆に省略していえば，とりあえずこの2つで，守れる城は造れたのである。

しかし，平城が重要な役割を果す関東などでは，状況は異なる。守備方と攻撃方は，幅わずか数十メートルの堀・土塁を隔てただけで向き合っているのである。橋・土橋を渡って攻めてくる敵を防ぐには，虎口・馬出などの設計がすべてを決する。また土塁もそれほど高くはできない。山城の切岸に比べれば貧弱きわまるから，折邪や曲輪相互の援護関係などが死命を制することになる。関東の中世城郭が，そうした方向で顕著な進歩を見せたのは当然のことであった。しかし，中国地方の山城はそうではなかったのである。

関連して注意を要するのは，上述の山城の特質からすれば，山城は，近世城郭に見られるような，曲輪を一つ一つ通過しながら中核に迫っていくという構造をとらない，とする仮説が導かれることである。この点からも，近世城郭を典型として据えられた視点によっては，少なくとも中国地方の山城はすくいとれないと言いうる。残念ながら，いまの段階で，それに代わるような研究の視点を提示することはできないが，とりあえず，今後の調査が山全体，とりわけ道のあり方にまで及ぶ必要があることだけは，強調しておきたい(43)。

注

(1) こうした問題点については，村田修三氏「中世の城館」(『講座　日本技術の社会史　6　土木』，日本評論社，1984年10月)などで指摘されている。

(2) 同上。

(3) 史料から中世城郭の構造を読み取ろうとする試みとしては，阿蘇品保夫氏「文献に見られる九州の中世城郭」(『日本城郭大系』別巻Ⅰ，新人物往来社，1981年4月)，市村高男氏「中世城郭史研究の一視点―史料と遺構の統一的把握の試み」(『中世東国史の研究』，東大出版会，1988年2月)，千田稔・小島道裕・前川要氏著『城館調査ハンドブック』(新人物往来社，1993年10月)，中沢克昭氏「中世城郭史試論」(『史学雑誌』102編11号，1993年11月)など。

(4) 千田氏等注3書，37～8頁。同様の見解は村田氏注1論文，188頁にもみえる。

(5) 全3巻，新人物往来社，1987年4月～7月。

(6) 1990年度から始まった東郷町による調査。報告書は『東郷町文化財報告書　第9集　羽衣石城址』(鳥取県東郷町教育委員会，1993年3月)。

(7) 前注書。なお注5書の羽衣石城の項には，吉田浅雄氏による略測ながらも精密な図がある。

(8) なお，本稿要旨の一部については，「南北朝期の山城の特質について」(松岡久人氏編『南北朝遺文　中国四国編』〈以下『南』と略称〉第六巻，月報，1995年1月)でも述べたが，データの使い方に多少違いがあるので，合せて参照していただければ幸いである。

(9) 南北朝期の史料は『南』第一巻～第六巻に拠り，それ以後のものについては各種の刊行された史料集から収集した。

(10) 『日本城郭大系』別巻Ⅱ(新人物往来社，1981年5月)。

(11) 注10書第14巻(新人物往来社，1980年4月)，山口県・岩国城の項。

(12) 注11書および注5書，鳥取県・江美城の項。

(13) 建武3年(1336)5月6日，三戸頼顕軍忠状案(『大日本古文書　毛利家文書』1526号，『南』348号)。

(14) 巻20。日本古典文学大系『太平記』(以下，すべてこれによる)二，310頁。

(15) 注5書，島根県・真山城の項，村田修三氏作成の縄張図。

(16) 『邦訳日葡辞書』では，尾崎(をさき)は「山や山脈の先端，頂」とされている。

(17) なお三本松城(石見)に関して，「三本松の萱尾に至り責め懸かる」という史料がある(天文24年(1555) 8月4日，益田藤兼感状，『萩藩閥閲録』〈以下『閥』と略称〉遺漏5の1，石州より山県半七取帰)。萱尾という尾(尾崎)である可能性も考えたが，この時の戦いはおおむね大手の固屋口である喜時雨(きじゅう)口の周辺で行なわれており(『津和野町史』第1巻，津和野町史刊行会，1970年8月，528頁～530頁)，それ以外に尾崎を攻めた一隊があったとは考えにくい。萱尾はこれ以外に見えないことも勘案し，単なる地名として除外することにした。

(18) 復刻版(名著出版，1972年4月)，第八編，446～7頁。

(19) 『太平記』二，235頁。なお，注10「城郭用語辞典」239頁参照。

(20) 1例をあげれば，表3№61で「攻口」とされていたところが，同年2月8日，大内義興感状写(「萩藩譜録」真鍋長兵衛安休，『広島県史　古代中世資料編Ⅴ』)では「詰口」と記されている。なお，両様見られるものについては，表3ではどちらか一方だけを取上げている。

(21) 『史跡毛利氏城跡　保存管理計画策定報告書』(広島県吉田町教育委員会，1988年3月)。

(22) 『角川日本地名大辞典　32　島根県』，桑原英二氏『まぼろしの戦国城下町』(同氏発行，1974年12月)。

(23) 寛永21年(1644)11月11日，山県長茂覚書(『大日本古文書　石見吉川家文書』151号)。

(24) 念のためにいえば，秀吉の陣地は山続きの太閤ガ平にあった。

(25) 欠年(天正8＝1580) 8月19日，吉川元春書状(『閥』74，粟屋縫殿72)。

(26) 高橋正弘氏『因伯の戦国城郭―通史編―』(同氏発行，1986年11月)159頁。

(27) 注3所引論文。

(28) 「固屋」での戦いも史料上には数多く見出される。例えば天文23年(1554) 6月11日，毛利元就・隆元連署感状写(『閥』巻31，山田吉兵衛1)の「蔵重固屋切崩時，敵討捕候」のように。しかし，こうした「某固屋」とは「某城」と同義で，城の部位を示すものではないと考えて，表3には採らなかった。

(29) 史料上の「虎口」には，「ここう」(危険な場所)の意味のものがあるが，そうしたものは除外した。例えば，文明17年(1485)11月3日，山名政豊感状(『閥』89，田総惣左衛門17)など。

(30) 『太平記』二，巻18，243頁，建武4年(1337) 2月の金崎城での戦いに「大手・搦手十万騎，切岸ノ下，塀際ニゾ付タリケル」とある。この塀際は切岸の下にあったようであるが，№94については本文のように考えるべきである。

(31) 松陽新報社出版部，1911年，102頁。なお同書は軍記物ではあるが，序言に「天正八年庚辰三月隠子藤原静楽軒編著，行年八十七歳，試老筆」とあるから，ほぼ同時代の述作である。

(32) 宮崎尾については，宮崎の尾崎という意味ではなく，単なる「宮崎尾」という地名ではないかとの疑いもあるかもしれない。しかし，「宮崎敵陣」という表現(『閥』41，志賀茂右衛門8など)のものがありながら，他方，「宮崎中尾」(『閥』80，岡吉左衛門6)や「宮崎之尾」(『閥』85，三戸六郎右衛門1)などとしたものがあることなどから，地名としては基本的には宮崎で，その尾崎という意味の「宮崎尾」と理解した。

(33) 村田修三氏「中世益田氏の居館と七尾城」(『歴史手帖』17―12，1989年12月)。

(34) 「中世城郭からの発見」(『歴史読本』1988年8月号)75頁。尾根道が維持しやすかったことについては，ほかに高取正男氏『日本的思考の原型』(平凡社，1995年3月)91頁。

(35) 例えば，注3『城館調査ハンドブック』29頁など。

(36) 『太平記』には，次のような記事がある。①「城ノ北ニ当タル石壁ノ数百丈聳エテ，鳥モ翔リ難キ所ヨリゾ登リケル」(巻2，106頁，笠置城)，②「堀ノ中，切岸ノ下マデ攻付テ，逆木ヲ引キノケテ打テ入ラントシケレドモ」(同右，115頁)，③「切岸ノ高サ堀ノ深サ幾程モナケレバ，走懸テ屏ニ着ン事ハ，最安ク覚ケレ共」(同右，117頁)，④「切岸ヲ襄ラントシケル処ヲ，屏ノ中ヨリ究竟ノ射手」(同右，204頁，以上，赤坂城)，⑤「大手・搦手十万騎，同時ニ切岸ノ下，屏際ニゾ付タリケル，城中ノ兵共是ヲ防ン為ニ，木戸ノ辺迄ヨロメキ出タレ共」(巻18，243～4頁，金ケ崎城)。しかし①は城方の無警戒に乗じて忍び込んだという記事，②～④は堀の斜面のことであり，⑤も切岸を登ったというものではなく，山城の切岸を攻め登ったという記事はないといってよい。

(37) いずれも毛利幸松丸か元就の感状で，表3№40・88以外のものは，次の通りである。『閥』19の児玉四郎兵衛3，同69の井上新左衛門1・2，同80の井上作左衛門2，同93の井上右衛門6。

(38) 二宮俊実覚書(『大日本古文書　吉川家文書別集』561号)。

(39) 例えば，注5書に図を載せている，槻下館・石井垣城・尾高城・江美城(吉田浅雄氏作図)など。そのほか富長城(西伯郡名和町)や土居城(西伯郡江府町，これについては吉田氏より縄張図を借用した)でも同様である。

(40) 戦いの日付がわかっていないものは文書日付のところに入れた。多少の年代的ズレはあるが，大勢は眺めうるものと思う。なお，表 3 №16は年欠であるが，白鹿城での戦いなので永禄 6 年(1563)のものとし，№20は天文24年(1555)の矢野城攻めの記事なのでそのように扱った。

(41) 例えば，注 3 『城館調査ハンドブック』166～170頁。

(42) 「放火・稲薙・麦薙と戦国社会」(『日本歴史』521号，1991年10月)。

(43) 例えば中井均氏「中世城館跡調査の成果と課題」(『考古学ジャーナル』353号，1992年10月)に窺えるように，山城調査はようやく崖＝切岸にまで注意が向く段階になってきたが，まだ道にまでは及んでいないようである。

(後記)

本研究は，1990年の東郷町による羽衣石城の曲輪分布調査，1992・3年度の鳥取県教育委員会による鳥取県内中世城郭予備調査，この 2 つの調査に従事した過程で構想したことが核になっている。そのことを銘記するとともに，後者の調査に対して，精密な縄張図を快く貸与された吉田浅雄氏に，この場を借りて深甚なる謝意を表したい。

(1995年 4 月30日受理)

表1　南北朝期の戦いの場

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
1	高津城	石見(益田市高津町)	45	大手	凶徒高津与二長幸高津郷小山構城郭楯籠之間・・押寄当城，於大手依致散々攻戦	1336,01,13	吉川経明軍忠状	建武3年1月日	吉川（南235）
2	福山城	備中(岡山県都窪郡)	標高302	大手	於備中国福山城大手，懸先致合戦，追落候了	1336,05,18	吉川経時軍忠状案	建武3年6月16日	吉川（南378）
3	小松城	伯耆(西伯郡会見町)	30	大手	馳向小松城大手致合戦忠節	1336,06,mi	出雲国造舎弟貞教軍忠状	建武3年7月日	千家（南428）
4	敷山城	周防（防府市牟礼）	250	大手	於大手懸先，切入城内	1336,07,04	吉川経明軍忠状	建武3年7月日	吉川（南432）
5	賀年城	長門(阿武郡阿東町)	100	大手	於賀年城致警固・・寄来賀年城之間・・自大手打出，凶徒・・追落	1337,05,22	虫追政国軍忠状	建武4年5月日	益田（南614）
6	豊田城	石見(益田市横田町)	110	大手	押寄豊田藤三郎致員城・・以下凶徒，為後巻寄来之間，翌日十九日於大手致度々□□	1340,08,19	益田兼見軍忠状	暦応3年8月27日	益田（南995）
7	三隅城	石見(那賀郡三隅町)	162	大手	於三隅城之大手，致日々夜々合戦	1348,08,24	君谷実祐軍忠状	貞和4年9月日	閥43，出羽源八(南1669)
8	鳥屋尾城	石見(那賀郡三隅町)	160	大手	押寄鳥屋尾城之大手合戦・・同夜半駕先城内賁入	1348,08,28	君谷実祐軍忠状	貞和4年9月日	閥43，出羽源八(南1670)
9	猿喰山城	安芸（山県郡千代田町）	標高791	大手(陣山)	楯籠猿喰山城之間，同八日，御発向時，御敵等自彼両城打出，道祖多尾陣取之間，為大手致散々合戦	1350,06,08	吉川実経軍忠状	観応1年7月27日	吉川（南1847）
10	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	搦手	於矢野城一族相共，為西搦手，自廿三日至于同廿六日致合戦之忠	1335,12,23	三戸頼顕軍忠状案	建武3年5月6日	毛利（南347）
11	長田城	伯耆(西伯郡大山町)		搦手	伯州馳向長田城，於搦手致合戦忠	1336,06,19	出雲国造舎弟貞教軍忠状	建武3年7月日	千家（南428）
12	木村山	石見		搦手	御敵引退木村山構城郭，同十二日打寄彼城郭，於搦手・・致散々合戦	1339,07,12	小笠原貞宗代武田弥三郎入道軍忠状	暦応2年8月20日	庵原（南881）
13	因島	備後		搦手	於当国因島，為大館右馬亮殿大将，構城郭楯籠之間，今年四月五日発向彼城，警固搦手	1343,04,05	三吉覚弁軍忠状	康永2年5月21日	備後鼓（南1266）
14	猿喰山城	安芸（山県郡千代田町）	標高791	搦手(陣山)	楯籠猿喰山城之間，同八日御発向之時，御敵等自彼両城打出，道祖多尾陣取間，為搦手，致忠節	1350,06,08	逸見大阿代子息有朝軍忠状写	観応1年7月日	小早川証文（南1851）
15	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	尾頸	矢野城合戦之時，押寄西尾頸高矢庫本，捨身命軍忠	1335,12,23	尼智阿代朝倉仏阿軍忠状	建武3年6月25日	熊谷（南383）
16	日浦山	安芸(安芸郡海田町)	338	尾頸	同十七日合戦時，浜手懸先，同廿日於搦手北尾頸，致散々合戦	1338,03,20	三戸頼覚軍忠状案	建武5年3月25日	毛利（南740）

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
17	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	北頸	今月廿三日押寄安芸国天野〈矢野〉城迄畢，同廿六日於北頸抽軍忠	1335,12,23	波多野景氏軍忠状	建武2年12月30日	黄薇古簡集（南212）
18	福屋城	石見（江津市有福温泉町）	260	尾崎（大手中尾）	取巻福屋城，日夜軍忠之処，同九月一日，於大手中尾，舎弟‥被射通	1341,09,01	逸見大阿代子息有朝軍忠状写	暦応5年6月18日	小早川証文（南1173）
19	黒谷城	石見(益田市柏原町)	210	山手	当国上黒谷城郭に今月十日大将軍御発向候之間，御共仕，山手打向，致合戦	1336,05,10	久利赤波妙行代公房軍忠状	建武3年5月12日	石見久利（南357）
20	高津城	石見(益田市高津町)	45	山手	同日高津城致山手合戦	1340,08,19	三井資基軍忠状	暦応3年8月25日	閥65，三井善兵衛(南994)
21	豊田城	石見(益田市横田町)	110	山手	発向于石州豊田城，小山陣取‥豊田公藤三郎以下凶徒，夜討‥十九日，自山手御敵追払	1340,08,19	平子親重軍忠状	暦応3年10月日	三浦（南1021）
22	木東城	石見(那賀郡弥栄村)	40	山手	押寄木東城西山手，抽御方之勢，致散々合戦	1346,07,30	内田致景代内田致世軍忠状写	貞和2年8月日	永田秘録所収内田（南1478）
23	福屋城	石見（江津市有福温泉町）	260	山手	同廿五日・・同夜兼見大石城山手致先懸，同廿六日夜彼城没落畢	1366,07,25	益田兼見軍忠状	貞治5年9月3日	益田（南3489）
24	板屋河	石見		麓	三隅凶徒等楯籠板屋河‥追落敵徒等，入替彼城支要害之処‥寄来之間，下合麓，致散々合戦	1341,08,01	安富彦三郎入道教元軍忠状	暦応4年8月5日	安富（南1097）
25	河上孫三郎入道城郭	石見		浜手	河上孫三郎入道城郭，於浜手小笠原又太郎長氏相共致軍忠候畢	1337,07,12	小笠原貞宗代桑原家兼軍忠状	建武4年7月25日	庵原（南638）
26	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	木戸(大手)	自大手木戸，切入城内処，親家被射左股畢	1335,12,26	周防親家軍忠状	建武3年5月7日	吉川（南349）
27	益田城	石見(益田市七尾町)	110	木戸(尾崎)	押寄彼城，責破北尾崎木戸，致散々合戦	1336,07,21	藤原兼茂軍忠状写	延元1年7月26日	閥121，周布吉兵衛（南426）
28	日浦山	安芸(安芸郡海田町)	338	木戸	至于同廿日，自西木戸責上，致合戦忠	1338,03,20	周防親重軍忠状	建武5年3月27日	吉川（南743）
29	生口	安芸（豊田郡瀬戸田町）		木戸口（大手）	御敵構城郭於生口島，令楯籠之間，今月四日先押寄彼城，於大手木戸口致合戦，同六日，令追落凶徒	1342,10,04	小早川氏平軍忠状写	康永1年10月20日	吉川家中并寺社(南1203)
30	三隅城	石見(那賀郡三隅町)	162	土橋(大手)	令発向三隅城，於大手土橋切所懸先陣，致散々合戦	1348,04,09	内田致世軍忠状写	貞和4年4月日	永田秘録所収内田（南1635）

備考：典拠欄の（　）内は『南北朝遺文』中国・四国編の文書番号である。「戦いの日」の欄のmiとは，晦日の意味である。以下，表2・3でも同じ。

表２　室町期の戦いの場

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
1	日高城	安芸(安芸郡蒲刈町)		麓	日高城麓重見将監在所依為切所，敵肝要抱候間・・及合戦	1452,u8,24	平賀弘宗小早川盛景等注進状写	(享徳１)閏８月24日	小早川証文368
2	甲山城	備後(庄原市山内町)	100	詰口	敵出張之時防戦・・殊於自要害之詰口，親類被官或討死，或被疵	zzzz,zz,zz	山名政豊感状	文明７年６月20日	山内127：閥13,山内縫殿189
3	法勝寺城	伯耆（西伯郡法勝寺町）	40	攻口	於伯州法勝寺城資口合戦之時	1480,09,14	山名政豊感状	文明12年10月５日	閥89，田総惣左衛門14
4	古高山城	安芸(三原市高坂町)	184	攻口	就高山城攻口開陣	zzzz,zz,zz	小早川元平書状写案	(文明７)４月11日	小早川証文202

備考：典拠欄の「小早川証文」・「山内」は『大日本古文書　家わけ文書』の各家文書。「閥」は『萩藩閥閲録』。
「戦いの日」の欄の年月日が不明の場合はｚで表わし，閏月はｕで表わした。以下，表３でも同じ。

表3　戦国期の戦いの場

No	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
1	陣山	出雲(能義郡広瀬町)		尾頸	雲州陣取退砌，於陣山尾久備，敵相付之処，井上与三右衛門尉同前に返合	1543,05,07	毛利元就・隆元連署感状案	天文12年5月12日	毛利283の5：閥109，三戸惣右衛門6
2	頭崎城	安芸（東広島市高屋町）	200	尾頸	於去月四日高屋頭崎尾頸合戦	1551,09,04	毛利元就・隆元連署感状	天文20年10月2日	閥80，井上作左衛門8
3	志川滝山城	備後(福山市加茂町)	250	尾頸・構際	志河切取候時，尾頸至構際，初度に相付鎧仕候	1552,07,23	毛利元就・隆元連署感状	天文21年7月28日	閥28，渡辺太郎左衛門3
4	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	尾頸	矢野要害尾頸明神山切崩候時	1555,04,11	毛利元就・隆元連署感状	天文24年4月28日	閥130，渡辺仁右衛門3
5	宮山城	美作(真庭郡落合町)	標高450	尾頸	宮山尾頸為山見，諸勢打出候之処，従城中出はり候条，及戦追崩	1579,12,11	小早川隆景書状	天正7年12月11日	閥119，児玉勘左衛門1
6	岩屋城	美作(久米郡久米町)	310	尾頸	以岩屋尾頸高仙一城被取付候	1580,11,04	小早川隆景書状	天正8年11月23日	閥100，児玉惣兵衛75
7	防己尾城	因幡（鳥取市岩本）	15	尾頸	彼城湖へ差出，尾頸計地続也，筑前守殿夜中に彼表御出馬，有尾頸之手充・・自身ハ城之尾崎際へ船ヲ寄	1581,07,zz	山県長茂覚書	寛永21年11月11日	石見吉川151
8	忍山城	備中(岡山市上高田)	標高240	尾頸	城山於尾頸敵一人被討捕候	1582,05,21	吉川元春書状	(天正10)5月23日	岡家文書29（岸田論文）
9	岩山カ	備中		尾頸	敵今朝今保川を打渡陣取候，岩山中間六七町に候，明日尾頸可取詰調儀迄候	zzzz,zz,zz	小早川隆景書状	(天正10)4月13日	閥125，宍戸藤兵衛15
10	不明	不明		尾頸	今夜者はけ山の尾頸へ火を数多ともしそろて，おとかし候，あを武略仕候	zzzz,zz,zz	某書状	(永禄6年3月)	閥52，兼重五郎兵衛6
11	幸山城	備中(都窪郡山手村)	標高164	尾頸	隆景其外方角之国衆之事者，幸山尾頸福山に陣候	zzzz,zz,zz	吉川元長書状写	(天正10)4月24日	石見吉川98
12	松山城	石見(江津市松川町)	標高143	尾頸	尾頸とうとこと申山に御陣被成候・・城より罷出候，就夫此方衆篠か丸と申山へ取上，其まま初口切懸，則時に切崩	zzzz,zz,zz	二宮俊実覚書	永禄5年	吉川・別561
13	宮尾城	安芸(佐伯郡宮島町)	30	尾頸	宮之城はや殊外よはり候て見え候よし申候，尾頸之堀ははやはや悉うめ候由申候	zzzz,zz,zz	毛利元就書状	天文24年9月27日	閥10，堅田安房244
14	猿掛城	安芸(高田郡吉田町)	370	尾頸	多治比於尾頸	zzzz,zz,zz	郡山城諸口合戦注文	(天文10年1月13日)	毛利287
15	松尾城	安芸（高田郡美土里町）	140	尾頸	於上庄松尾要害尾頸抽戦功	zzzz,zz,zz	毛利興元感状	永正13年2月29日	閥90，粟屋七郎右衛門2

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
16	白鹿城	出雲(松江市法吉町)	標高154	尾（らんとうの尾）	被成御取詰候時，らんとうの尾より仕寄穴を御掘せ被成候，敵もまた多賀丸より横穴をほり候て防き候，互に堀寄敵の横穴に行相	zzzz,zz,zz	姓氏未詳軍忠付立	欠年月日	閥83，福間彦右衛門24
17	白鹿城	出雲(松江市法吉町)	標高154	小高丸	於白鹿小高丸合戦之時，太刀打衆に差続罷越候	1563,10,13	毛利元就書状	(永禄6)10月18日	閥64，二宮太郎右衛門1
18	白鹿城	出雲(松江市法吉町)	標高154	小白鹿	至白鹿執懸，小白鹿切取，其外諸丸固屋以下，不残焼崩候，甲丸一所に相極候	1563,08,13	毛利元就書状	(永禄6)8月15日	閥119，福井十郎兵衛19
19	郡山城	安芸(高田郡吉田町)	200	尾(宮崎尾)	於宮崎尾，敵陣切崩	1541,01,13	毛利元就感状	天文10年1月14日	閥44，信常太郎兵衛6
20	矢野城	安芸(安芸区矢野町)	380	尾(明神尾)	矢野於明神尾鑓仕，御感状在之	zzzz,zz,zz	桂元将軍忠覚書	天正2年5月25日	閥39，桂善左衛門3
21	郡山城	安芸(高田郡吉田町)	200	山手	於山手	zzzz,zz,zz	郡山城諸口合戦注文	(天文10年1月13日)	毛利287
22	日和城	石見(邑智郡石見町)	176	岸際	於石州日和要害岸窮穿鑓事	1557,05,02	杉原盛重感状	弘治3年5月2日	知新集，山代孫右衛門1（広島県史・県外）
23	羽衣石城	伯耆(東伯郡東郷町)	280	岸際	羽衣石岸際迄相動，宗徒之者数百人討捕候・・無残令放火稲薙	1580,08,13	吉川元春書状	(天正8)8月15日	閥115，湯原文左衛門64
24	松尾城	安芸（高田郡美土里町）	140	麓	於横田松尾要害麓合戦之時	1516,07,17	毛利興元感状	永正13年7月21日	閥・遺4の1，伊予八幡神主河野肥前守2
25	赤穴城	出雲(飯石郡赤来町)	300	麓	赤穴要害麓動之時，被矢疵	1542,06,07	大内義隆感状	天文11年8月24日	閥46，大庭源大夫10
26	鹿野城	因幡(気高郡鹿野町)	140	麓	於鹿野麓，宗勝被遂合戦候，悉皆以其方行粉骨被得大利候	1564,07,22	毛利元就感状	永禄7年8月2日	閥46，小寺忠右衛門41
27	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	麓	於富田城麓中須，敵付送，既此方者共難儀之処及合戦	1566,04,21	毛利元就・輝元連署感状	永禄9年5月5日	閥11，浦図書86：小早川・浦86
28	不明	不明		麓	打廻被仰付候処，要害余依被差上，依城内も罷出被及合戦	1566,05,24	毛利元就書状	(永禄9)5月25日	閥124，平賀九郎兵衛3
29	不明	不明		麓	至敵城麓，足軽被差遣，打廻被仰付候，少々敵雖罷出候	zzzz,04,18	桂元忠書状	欠年4月19日	閥153，悪喜右衛門6
30	松山城	備中（高梁市広瀬）	標高480	麓・放火麦薙	広瀬固屋之事一着之上，打続松山麓まて放火麦薙悉被申付候	zzzz,zz,zz	宍戸隆家書状	(天正3)3月27日	閥88，山内源右衛門14
31	神辺城	備後(深安郡神辺町)	110	麓（稲薙）	神辺表稲薙之儀	zzzz,zz,zz	毛利元就・隆元連署書状	(天文17カ)7月10日	閥77，馬屋原九右衛門2
32	高瀬城	出雲(簸川郡斐川町)	200	麓廻稲薙	新山・高瀬麓廻稲薙之儀，無残所申付候	zzzz,zz,zz	毛利輝元・小早川隆景連署書状	(元亀1)9月5日	閥55，国司与一右衛門13

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
33	右田岳	周防(防府市下右田)	標高185	麓	今度右田岳罷籠辛労候，然処山口築山之敵退散候而，当城麓罷通之刻，罷下付送数度及防戦	zzzz,zz,zz	毛利輝元感状	(永禄12)10月晦日	閥19，児玉四郎兵衛15
34	熊懸要害	不明		麓	今日熊懸要害麓へ相動，得勝理候，敵小勢にて罷出候	zzzz,zz,zz	松田経通書状	欠年8月13日	吉川407
35	金山城	安芸（安佐南区祇園町）	400	麓	今度於金山麓防戦之刻，両度被矢疵之由	zzzz,zz,zz	田原親董感状	天文10年4月26日	足立悦雄1（広島県史・県外）
36	不明	不明		麓	敵陣麓罷出，敵弐人討捕	zzzz,zz,zz	福原貞俊等連署書状	(天正10)5月27日	閥50，飯田与一左衛門13
37	忍山城	備中(岡山市上高田)	標高240	麓	城山麓にて敵壱人被討捕之	zzzz,zz,zz	二宮就辰・佐世元祝連署書状	(天正8)9月28日	閥80，岡吉左衛門37
38	新山城	出雲(松江市法吉町)	標高256	麓	新山・高瀬麓廻稲薙之儀，無残所申付候	zzzz,zz,zz	毛利輝元・小早川隆景連署書状	(元亀1)9月5日	閥55，国司与一右衛門13
39	鍛治屋	備中（岡山市足守）		麓	於鍛治屋山麓，其方中間通路切仕	zzzz,zz,zz	毛利輝元書状	(天正10)5月7日	閥80，岡吉左衛門17
40	有田城	安芸（山県郡千代田町）	40	山下小溝	武田刑部少輔有田要害発向之時，於山下小溝鎧被仕	1517,10,22	毛利元就感状	永正14年10月28日	閥93，井上右衛門7
41	長台寺城	伯耆（米子市新出）	標高281	山下	長台寺於山下，片山一所進藤源次郎深田敵討捕之由	1563,u12,1	小早川隆景書状	(永禄6)閏12月10日	閥31，山田吉兵衛8
42	鬼ヶ城	因幡(八頭郡若桜町)	234	山下	尼子居城鬼城於山下，及合戦	1575,08,29	草刈重継一所衆軍忠状	天正3年9月18日	閥34，草刈太郎左衛門8
43	石米	美作（久米郡）		山下	河端居城，石米於山下防戦	1583,08,18	草刈重継一所衆軍忠状	(天正11)9月1日	閥34，草刈太郎左衛門24
44	龍ノ口城	備前（岡山市祇園）	標高257	山下	去廿日於龍口山下及合戦	zzzz,07,20	浦上宗景書状	欠年7月24日	閥・遺5の2，小川権左衛門1
45	亀石	備中（賀陽郡）		山下	於亀石山下敵討捕	zzzz,zz,zz	毛利輝元書状	(天正10)5月23日	閥80，岡吉左衛門20
46	伊賀要害	備前(御津郡御津町)	227	山下	伊賀要害山下迄悉討果	zzzz,zz,zz	吉川元春書状	(天正8)1月6日	閥115，湯原文左衛門145
47	垪和	美作(久米郡中央町)		山下	今度垪和え打渡，倭文動之時，於城山山之下敵一人被討捕	zzzz,zz,zz	粟屋元秀書状	天正8年2月23日	閥50，飯田与一左衛門17
48	神辺城	備後(深安郡神辺町)	110	城下	六月十八日・同廿日，於村尾城下合戦之時	1548,06,18	大内義隆感状	(天文17)12月10日	吉川508
49	須々万	周防（徳山市須々万本郷）	40	城下	元就其口令在陣之儀候間・・於須々万磨城下，敵十三人討捕候，同於町野口，山口衆・・廿余人討捕候	1556,09,22	毛利隆元書状	(弘治2)9月25日	閥35，阿曽沼二郎三郎12

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
50	鳥取城	因幡（鳥取市東町）	240	城下	於鳥取城下敵被討捕候	1573,08,01	尼子勝久感状	天正1年8月21日	閥120，中井惣左衛門2
51	用瀬城	因幡(八頭郡用瀬町)	240	城下	於用瀬城下及合戦	1573,08,19	尼子勝久感状	元亀4年10月5日	閥120，中井惣左衛門3
52	岩尾山城	美作（津山市吉見）	190	城下	岩尾山城下堀坂表動之時	1580,09,29	草刈重継軍忠状	(天正8年10月)	閥34，草刈太郎左衛門17
53	大野要害	安芸(佐伯郡大野町)	標高265	詰口	於芸州大野要害詰口，被疵	1524,05,06	陶興房感状	大永4年5月13日	加藤文書2（広島県史・県外）
54	国府城	安芸(安芸郡府中町)	10	詰口	於仁保島并国府城詰口	1527,03,07	野田興方合戦注文	大永7年7月18日	閥102，冷泉五郎122
55	仁保島城	安芸(南区黄金山町)	221	詰口	於仁保島并国府城詰口	1527,03,07	野田興方合戦注文	大永7年7月18日	閥102，冷泉五郎122
56	頭崎城	安芸（東広島市高屋町）	200	詰口	於芸州高屋平賀蔵人大夫興貞要害頭崎詰口	1536,11,07	石井元家合戦手負注文	天文6年4月24日	石井昭文書2（広島県史・県内）
57	祝城	備後(三次市高杉町)	5	詰口	於去年〈天文廿二，七ノ廿三〉備後国祝要害詰口	1553,07,23	白井賢胤軍忠状	天文23年6月4日	白井文書5（広島県史・県外）
58	大塚要害	安芸（安佐南区沼田町）		攻口	於大塚要害攻口，下人被矢疵	1522,02,zz	弥富依重軍忠状	(大永7)3月19日	今仁文書1（広島県史・県外）
59	桜尾城	安芸（廿日市市桜尾本町）	29	攻口	於東山攻口，自身矢疵	1524,07,25	沓屋勝範軍忠状	大永5年3月23日	閥137，沓屋勝八8
60	米山要害	安芸（東広島市カ）		攻口	米山要害於攻口日夜馳走	1525,zz,zz	弥富依重軍忠状	(大永7)3月19日	今仁文書1（広島県史・県外）
61	石道新城	安芸（佐伯区石内）		攻口	於芸州新城攻口，被石疵	1527,02,07	大内義興感状	大永7年3月15日	閥163，石川吉郎右衛門3
62	鳥子城	安芸（安芸区瀬野川町）	60	攻口	於鳥子攻口馳走之段	1527,03,08	弥富依重軍忠状	(大永7)3月19日	今仁文書1（広島県史・県外）
63	久村城	安芸（安佐北区高陽町）	75	攻口	鳰島城・国府城・木嶺城・久村城責口，別而忠儀粉骨之次第	1527,zz,zz	田原親重感状	欠年(大永7カ)9月2日	入江文書1（広島県史・県外）
64	木嶺城	安芸（東区安芸町）	標高413	攻口	鳰島城・国府城・木嶺城・久村城責口，別而忠儀粉骨之次第	1527,zz,zz	田原親重感状	欠年(大永7カ)9月2日	入江文書1（広島県史・県外）
65	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	口(菅谷口)	於富田要害菅谷口合戦之時，射鏑下之矢候	1543,03,14	毛利元就・隆元連署感状	天文12年3月18日	閥19，児玉四郎兵衛7

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
66	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	口（鐘尾寺口）	至出雲国富田要害麓鐘尾寺口，被矢疵	1543,03,14	大内義隆感状	天文12年6月6日	旧・島根県史7，66頁
67	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	口(塩谷口)	富田要害塩谷口合戦之時，一高名	1543,04,12	毛利元就・隆元連署感状	天文12年4月12日	毛利283の11
68	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	口(七曲口)	打廻被仰付之，於七曲口，御手之衆被及合戦之由	1566,05,24	小早川隆景書状	(永禄9)5月25日	平賀97：閥124,平賀九郎兵衛24
69	郡山城	安芸(高田郡吉田町)	200	諸口	天文九年九月四日ヨリ於諸口合戦注文事	1540,09,04	郡山城諸口合戦注文	(天文10年1月13日)	毛利287
70	温湯城	石見(邑智郡川本町)	160	諸口	諸口より仕寄を被寄候へ共，城よき故懸口無之候条	1558,05,24	二宮俊実覚書	永禄1年	吉川・別561
71	私部	因幡(八頭郡郡家町)	120	諸口	今度私部要害事，諸口依被取詰之，頓退散	zzzz,zz,zz	山名韶熙〈祐豊〉書状	(天正3)10月13日	吉川584
72	田総	備後(甲奴郡総領町)		固屋口	去十一日，至田総相動，於固屋口合戦之時	1544,03,11	毛利元就・隆元連署感状	天文13年3月13日	毛利283の3
73	神辺城	備後(深安郡神辺町)	110	固屋口・城越之鎚	於神辺固屋口，城越之鎚	1548,06,18	毛利隆元感状	天文17年6月23日	閥35，渡辺小右衛門4
74	不明(神辺カ)	備後		固屋口	於備後外郡安那之郡籠屋口動之時	1549,04,17	平賀隆宗軍忠状	天文18年4月18日	平賀169
75	三若	備後(三次市三若町)	200	固屋口（出張口）	去三日，三若要害固屋於出張口，構越之被及鎚候	1553,08,03	毛利元就・隆元連署感状	天文22年8月18日	閥145,作間四郎左衛門2
76	三本松城	石見（鹿足郡津和野町）	212	固屋口（喜計表）	吉見督城固屋口喜汁表，卯ノ十八動之時	1554,04,18	白井賢胤軍忠状	天文23年6月4日	白井文書5（広島県史・県外）
77	三若	備後(三次市三若町)	200	固屋口	昨日七日，於三若固屋口合戦，被突鎚	zzzz,02,07	山内豊通書状	欠年2月8日	閥104，湯浅権兵衛105
78	不明	不明		固屋	其表之事被寄近陣，剰当日固屋被切崩・・敵城落去不可有程之由・・本丸落去之御左右雨山待申候	zzzz,zz,zz	毛利元就・隆元連署書状	(天文21カ)8月13日	閥40，井原藤兵衛1
79	高嶺城	周防（山口市上字野令）	標高338	二ノ丸口	二ノ丸口付置山県筑後守・新山五郎左衛門働	zzzz,zz,zz	毛利元就書状	(永禄12)11月25日	閥・遺2の4，山県平八10
80	鳥取城	因幡（鳥取市東町）	240	仕寄	塀堀柵木取積，十廿間に矢倉を構，笄〈筏カ〉を焼，袋川には乱杭縄網を張	1581,07,zz	山県長茂覚書	寛永21年11月11日	石見吉川151
81	不明	不明		仕寄	今夜於仕寄口，御手衆御動，誠無比類	zzzz,zz,zz	毛利元就感状	欠年9月11日	吉川515

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
82	不明	出雲		仕寄口	布部此表両度御太利・・夜前者我等仕寄口へ為御見舞御出	zzzz,zz,zz	吉川元春自筆書状	(永禄13) 4月17日	毛利371
83	国府城	安芸(安芸郡府中町)	10	木戸口	於佐東府要害城戸口，悴者・・粉骨之次第	1522,11,16	大内氏奉行人連署奉書写	大永2年11月29日	石井英三4（広島県史・県内）
84	柏村	不明		固口(虎口)	於柏村固口，被及合戦	1521,04,09	政盛感状	永正18年4月10日	閥149，宮与左衛門17
85	桜尾城	安芸（廿日市市桜尾本町）	29	虎口水手	芸州東山北面虎口水之手	1524,07,25	仁保興奉合戦注文	大永4年8月10日	三浦95：閥45，三浦又右衛門133
86	不明	出雲		虎口（大手虎口）	於雲州尼子要害大手虎口，分捕高名神妙	1552,09,zz	内藤興盛感状	天文22年6月16日	閥170，勝間田八郎左衛門13
87	志和知城	備後（三次市下志和知町）	50	切岸	於志和智之城切岸抽忠戦	1516,02,02	毛利興元書状	永正13年2月13日	閥41，渡辺源四郎1
88	有田城	安芸（山県郡千代田町）	40	切岸	武田刑部少輔至有田要害出張候，仍当手衆切懸候而，彼於切岸抽戦功	1517,10,22	毛利幸松丸感状	永正14年10月28日	閥109，三戸惣右衛門9
89	大歳山	安芸（呉市）		切岸	去五日千束要害被取付・・大歳山切岸被相動候	1525,04,05	陶興房書状	(大永5) 4月7日	乃美文書正写6（広島県史・県外）
90	松尾城	安芸（高田郡美土里町）	140	切岸	松尾於切岸構越之合戦	1529,05,02	毛利元就感状	享禄2年年5月3日	閥73，粟屋孫次郎1
91	赤穴城	出雲(飯石郡赤来町)	300	切岸	於出雲国飯石郡赤穴城責之時切岸，祐盛郎従僕従被疵	1542,07,27	出羽祐盛軍忠状	天文11年7月29日	閥43，出羽源八80
92	槌山城	安芸（東広島市八本松町）	260	切岸	明神山切岸	1551,09,11	陶隆房感状	(天文20) 9月23日	閥11，浦図書67：小早川・浦10
93	小松城	不明（美作カ）		岸崖	至小松城岸涯，天神山衆取詰之処，被及合戦	zzzz,07,08	宇喜多直家感状	欠年7月11日	沼元家文書4（岡山県古文書集3）
94	槌山城	安芸（東広島市八本松町）	260	塀際	西条明神山塀際合戦	1551,09,11	毛利元就・隆元連署感状	天文20年9月22日	閥59，平佐権右衛門3
95	白鹿城	出雲(松江市法吉町)	標高154	塀際	従要害，我等詰口え仕懸候之処，則懸合城内え追込，於塀際敵討捕勝利・・堀口衆合戦	1563,09,10	吉川元春軍忠状	永禄6年11月13日	吉川511
96	赤穴城	出雲(飯石郡赤来町)	300	塀足	於赤穴要害詰口，最寄責上，付塀足相戦	1542,07,27	興勝感状	天文11年8月2日	旧島根県史7，49頁
97	大田城	石見(大田市大田町)	標高160	塀足	至太田造山成動候処，於塀足，数刻戦被疵候	1548,11,24	小笠原長雄感状	天文18年12月5日	平田文書（新・島根県史495頁）

No.	城郭名	所在地	比高(m)	戦いの場	記事	戦いの日	文書名	文書日付	典拠
98	赤穴城	出雲(飯石郡赤来町)	300	水手	赤穴要害於水手，陶方人数相供に無比類動	1542,07,27	吉川興経感状	天文11年7月28日	吉川・別326
99	山吹城	石見(大田市大森町)	210	水手	至銀山毛利殿動之時，於山吹水手，僕従・・敵一人討取候	1561,04,12	小笠原長雄感状	永禄4年5月20日	清水文書（新・島根県史504～5頁）
100	不明	不明		水手	水越至水手待伏仕候刻，付送り二重行仕候	zzzz,07,23	政幸感状	欠年7月24日	閥130，進三郎兵衛1
101	鴨城	備中（岡山市加茂）	平城	外構	逆意之者在之付而，羽柴自身至外構詰寄終日雖及防戦候，甲丸以堅固之合力，即切崩敵数人	zzzz,zz,zz	小早川隆景書状	(天正10) 5月4日	閥102，冷泉五郎58
102	祝城	備後(三次市高杉町)	5	段	備後三谷郡高杉城切崩之時，於段為太刀始頸取	1553,07,23	宍戸隆家感状	天文23年8月10日	閥88，山内源右衛門10
103	旗山	石見		小屋丸	至旗山小屋丸，福屋・吉川切懸候之処，志谷同前堅固覚悟仕，敵仕退候	1557,04,25	小笠原長雄感状	弘治3年4月27日	平田文書（新・島根県史496頁）
104	鴨城	備中（岡山市加茂）	平城	二丸	生石構逆心，既羽柴引入，至二丸攻上，及難儀候処，以御手柄敵被仕退候	zzzz,zz,zz	毛利輝元書状	(天正10) 5月8日	閥40，上山庄左衛門3
105	高瀬城	出雲(簸川郡斐川町)	200	二ノ丸	高勢事も小高勢又二ノ丸悉焼崩候	zzzz,zz,zz	毛利輝元・小早川隆景連署書状	(元亀1)11月12日	閥47，南方九左衛門22
106	私部	因幡(八頭郡郡家町)	120	二・三ノ丸	因州之儀，私部二三之丸迄仕取之由候	zzzz,zz,zz	毛利輝元書状	(天正3カ) 9月14日	閥6，毛利伊勢4
107	松山城	備中（高梁市広瀬）	標高480	天神丸	竹井宗左衛門尉・・以下致現形，天神丸大松山御仕取之由	zzzz,zz,zz	広尊・隆亮連署書状	(天正3) 5月22日	三原城壁文書（楢崎）4（広島県史・県内）
108	富田城	出雲(能義郡広瀬町)	標高183	抱口	永々籠城・・殊今度毛利取懸之刻，於其抱口合戦場，以鉄砲敵数人討捕	zzzz,zz,zz	尼子義久感状	永禄8年10月1日	蒲生文書（新・島根県史468頁）

備考：典拠欄の「閥」とは『萩藩閥閲録』。「毛利」・「吉川（石見吉川・別集を含む）」・「小早川」・「平賀」とは『大日本古文書　家わけ文書』の各家文書。「広島県史・県内」は『広島県史』古代中世資料編Ⅳ。「広島県史・県外」は同Ⅴ。「旧・島根県史」は本文の注18参照。「新・島根県史」は『新修島根県史』史料篇1　古代・中世。「岡山県古文書集」とは藤井駿・水野恭一郎氏編『岡山県古文書集』。「岸田論文」とは岸田裕之氏「史料紹介『新出岡家文書』について―その翻刻と解説」（『史学研究』203号，1993年12月）。